

# 『勢語臆断』について

허 정 은\*

(e-mail : yada1004@hanmail.net)

---

## 目 次

---

1. はじめに
  2. 注釈の内容
    2. 1 歌を理解する態度について
    2. 2 物語の「文勢」について
    2. 3 文献的な証明を重視する注釈態度
      2. 3. 1 語源について
      2. 3. 2 史実を証明する注釈態度
  3. おわりに
- 

## 1. はじめに

『伊勢物語』は、藤原定家によって、平安文学の精髓として認識され、鎌倉時代の歌道家の成立及び歌学の本格的な活性化と共に研究されてきた古典で、注釈的研究も多く行われてきたと言える。

『伊勢物語』注釈の時代区分は鎌倉時代の古注<sup>1)</sup>、室町時代の旧注<sup>2)</sup>、旧注の時代

---

\* 釜山大学校 日語日文学科 講師

- 1) 古注というのは、鎌倉中期から室町初期までの伊勢物語注釈書の総称として、『和歌知顯集』及び冷泉家流古注が代表的なものとして挙げられる。特徴としては、物語の登場人物すべてに実在の人物の名前をあてて考えることと各章段の事件について、何年何月何日にあったことと注する態度があることの二つが挙げられる。片桐洋一 (1987) 『伊勢物語の研究(研究編)』明治書院 p488 しかし、その内容を探してみると、当たっていないのが分かる。それで、この注釈態度を批判しながら、出たのが旧注である。
- 2) 旧注というのは、室町中期から江戸初期までのことで、室町中期の一条兼良の『伊勢物語愚見抄』からはじまり宗祇流の注釈書類やそれを受けついで三条西家流の注釈書類を言う。たとえば、宗祇の講釈で、『伊勢物語

以後は新注<sup>3)</sup>に分けているが、特に、『伊勢物語』は本格的な出版の時代を迎える江戸時代に数多くの板本及び注釈書が刊行されたが、このような現状は江戸時代における『伊勢物語』需要がそれほど多かったということを意味すると言える。

本稿では、その中で、そのような多数の江戸時代の『伊勢物語』注釈書の中で、契沖<sup>4)</sup>の『勢語臆断』について、考察してみる。契沖は江戸時代前期を代表する国学者として、復古を主張し、特に『万葉集』研究に励んでいたが、『勢語臆断』は、『万葉代匠記』(1679年)の執筆から13年後(1692年)に書かれた注釈書である。

『勢語臆断』に対する既存の研究は、大津有一氏によって行われたものがある。大津氏の『伊勢物語古註釈の研究』は『勢語臆断』の成立年代、形式などについて触れているが<sup>5)</sup>、本稿では、新注の時代を開く『勢語臆断』がどんな内容的な特徴を持っているの

山口記』『伊勢物語肖聞抄』『伊勢物語宗長聞書』などの注釈書がまとめられた。宗祇流の注釈は、以後、実隆・公条・実枝の三代の三条西家の説を集大成した細川幽齋の『伊勢物語闕疑抄』に伝わっている。この旧注の説を諸注集成したことが『伊勢物語拾穂抄』である。旧注の最大の特徴は古注の批判からはじまっていて、文芸的な内容を持っていることである。大津有一(1986)『増訂版伊勢物語古註釈の研究』八木書店 p25 このように、宗祇の説を従う三条西家の説が旧注の主流になる。

このような旧注の態度については、一例を通じて考察してみる。26段の「思ほえず袖にみなどのさわかかなもろこし船のよりしばかりに」の歌については、『伊勢物語山口記』は「おほほえずとは思ひがけず也。もろこし舟のよりしばかりのし文字は。過去にあらず。やすめ字也。当時はかやうによみ侍らず。忽はなみだのおほき義也。」とある。太田藤四郎(1980)『続群書類従』第18輯下 続群書類従完成会 p644

『伊勢物語肖聞抄』は「おもほえず袖に湊の、中将、二条后に密通の事は、染殿后いましめ給ふべきを、あはれみ給ふ所のうれしさに、落る涙を、おもほえず袖にみなどのさわか哉といへり。猶深く悦の涙をいはむとて、もろこし舟のよりしばかりといへり。よりしのし文字は、やすめ字也。」とある。片桐洋一(1987)『伊勢物語の研究(資料篇)』明治書院 p610

『伊勢物語宗長聞書』は「おもほえず袖にみなど、二条の后に心をかけ侍ることは、そめどのの後はさめたまふべきを、わびたまひ侍れば、おもほえずと云也。もろこし船もとは、今のよろこびをふかくいはんためなり。このよりしの「し」はやすめ字也。」とある。片桐洋一(1987)『伊勢物語の研究(資料篇)』明治書院 pp672~673

『伊勢物語闕疑抄』は「二条后へ業平密通を、染殿后尤御いましめ有べき事なるに、我心ををしはかりて、あはれみ給御心ざし、ありがたき事也。そのうれしさのあまりにの涙也。(中略)よりしの「し」はやすめ字也。(後略)」とある。片桐洋一(1987)『伊勢物語の研究(資料篇)』明治書院 p771

以上のように、旧注は師説を従いながら注釈を書き加える形式であるのが確認できる。

3) 新注というのは、旧注の時代の以後で、江戸時代の注釈書を言う。国学者と称せられた人々の勢語註釈が主流になったのが特徴である。『勢語臆断』からはじまるが、次の『伊勢物語童子問』と、此注釈書の影響を受けた『伊勢物語古意』や『伊勢物語古意追考』がある。これらの注釈を基として、『勢語図説抄』を著わし、その後は、『伊勢物語新釈』などの注釈書がある。大津有一(1986)『増訂版伊勢物語古註釈の研究』八木書店 p25、福井真助(1999)『伊勢物語』『新編日本古典全集12』小学館 pp240~241 通説には、「国学者と称せられた人々の勢語註釈が主流になった」のが新注であると説明しているが、本稿ではそのような国学者である契沖は、どういふふう注釈を行っているかという注釈の傾向と態度について具体的に考察してみるものである。

4) 契沖は国学者として著名。加藤清正の重臣下川氏の出であるが、家が没落、自分は真言宗の僧となった。晩年大坂の円珠庵に住み、『万葉代匠記』ほかの多くの著作をのこした。元禄十四(一七〇一)年没、六十二歳。橋本不美男・有吉保・藤平春男(1987)『歌論集』小学館 p562

5) 大津氏の『伊勢物語古註釈の研究』は『勢語臆断』の成立年代、形式などについて短く触れているが、主な

かについて具体的に考察してみる。これを通じて『伊勢物語』注釈史でのこの書の特徴及び位置付けを行ってみたい。

## 2. 注釈の内容

### 2.1 歌を理解する態度について

この章では、『勢語臆断』で見られる歌を理解する態度について考察してみよう。まず、48段から見ると、

今そしるくるしき物と人またむさとをはかれすとふへかりけり  
人を待はくるしき物なりけりと今そしるといふ心にて、第二句より上へかへるなり。よりて二句の下も句絶なり。人を待わふるによりて、人またむ里をはかれすとふへき物なりとわか心に領解したる心なり。人またんは人のまたんにても、人をまたむにてもたがふへからず。惣しての世の事をいへり。これ身をつみて人のいたさ知といふ怨のころなり。さきの哥に君によりおもひならひぬとよめるにおなし。約束してこぬ人をばさしもうらみはらたたずして、人またん里をばめがれずとふへき物なりとおもひるといへる温和なる心なり。かかる心ありてぞ、哥といふものはよまれ侍るへき」<sup>6)</sup>

のように、48段の歌について説明しているが、人を待つのは苦しいことであることを初めて知ったという内容で、「人またんは」は「惣しての世の事」を言っていると述べ、「怨」の心情を表していると注釈している。「人またん里」については、約束して来ない人を恨まなく「温和」の心を表していると述べている。このような心があるので、歌が詠まれることだと注釈している。

要するに、歌は心情を表すもので、歌が読まれる理由について注釈しているのである。次に、45段では

行蛸くものうへまていぬへくは秋風ふくとかりにつけこせ  
此哥後撰集には秋部上に入れたり。告こせは告よと願ふ心也。古事記に、八千子神の御哥に、うれたくも、なくなる鳥か。此鳥も、打やめこせね。とよませたまへるは鳴やみねとのたまふ也。万葉に乞の字をこそとよめるもねかふ詞也。せとそ五音通すればこそこそ同じ詞也。万葉に帰雁の哥に

内容は、『勢語臆断』のいろいろな底本を紹介し、その底本を比較して説明をしている。

6)以下、引用する『勢語臆断』の本文は築島裕・林勉・池田利夫・久保田淳の『契冲全集第九巻』（勢語臆断源註拾遺他）（岩波書店、1974）による。pp 7～218

春まけてかく帰るとも秋風にもみちくの>山をこえこさめや  
 又秋風にさそはれ渡る雁金とも、秋風にはつ雁金ぞ聞ゆなるともよみて、秋風にさそはれてくる物なるに、夜ふけて涼しさの、はや秋風の吹たちたるこちすれば、雁に告こせとは蜚にあつらふるなり。もしは魂は冥漢に帰する物なれば、蜚の高く飛あかるにつけて、たましひに今ひとたび帰りこよと告よといふ心を、雁は春帰りても秋は又来る物」なれば、よそへて雁に告こせとよめるにや。このをとこ見ふせりてといふには、此心もあらんやうにおほゆるにや。

のように、『万葉集』の帰雁の哥を挙げ、雁について注釈している。魂は「冥漢」に帰る物であるので、蜚の高く飛び上がるにつけて魂は「今一度帰って来いよ」と願う心を、春に帰ってもまた秋に来る物である雁に喩えて、心情を表していると言っている。雁の属性を通じて、この歌では心情を喩えていると説明している。

このように、『勢語臆断』は「喩え」が持っている「本意」を通じて、歌を理解しようとしているのが分かる。

また、58段では

むくらおひてあれたる宿のうれたきはかりにもおにのすたくなりけり  
 (前略) おにとは女をいへり。たとへは羅刹女のいつはりしたしみて、後には夫をくふごとく、女にも似たる心ある故にいふにや。但これはあまりにおそろし。和名集に或説におにとは隠の字の音を和語にいひなせるよしなれば、彼鬼は陰気の精」なるに、女もまた陰気をうけて、かくることをその性とすが相似たれば、たとへていふにや。むくらおひてあれたる宿、陰気を好める鬼のあつまるへきさき也。

のように、「おに」は女の人を言っていると述べている。『和名集』の或説を挙げているが、「おに」とは「隠」の字の音を和語に言いなす由来があるので、その鬼は「陰気の精」で、女の人も「陰気」を受けて隠れることがその性と相似るので、喩えているのではないかと言っている。「むくらおひてあれたる宿」は「陰気」を好む鬼が集まる氣勢であると注釈している。

このように、58段では『和名集』を根拠として、歌の中での「喩え」について説明しているのがわかる。

さらに、107段では

つれつれのなかめにまさる涙川袖のみひちてあふよもしなし  
 古今恋の哥第三詞書に業平朝臣の家に侍りける女のもとよみてつかはしける敏行朝臣とて、袖のみひちてを袖のみぬれてと有。つれつれと心のうつる方もなく女をおもひぬるたる折ふしのながめを、長雨にそへてなかめにより涙川の水まされば、袖のみいたづらにぬれてわたる

よしのなしとなり。川を渡るはあふ事の喩なれば、たとへの本意をもてあふよしもなしとよめり。古哥にかやうにたとへと本意とをまじへてよめることおほし。(中略) 哥には、川とみながらえこそわたらねなどあまたよめり。或注にながめは長雨をかけたるにあらずといふ誤なり。六帖に雨と涙川とふたつの題にいれたり。此日雨ふりけるにや。(省略)

のように、「つれつれのなかめにまさる涙川袖のみひちてあふよしもなし」の歌について説明している。この歌は私はなすこともなく、女の人に物思いにふけているが、その時の「ながめ」を、「長雨」にかけて詠んでいるものとする。すなわち、「ながめ」を「長雨」にかけているが、この「長雨」より「涙川」の水量が増すので、涙で袖が濡れる意味を含めていると述べている。また、「川を渡る」のは逢う事を喩えているので、「喩え」が持っている「本意」を「あふよしもなし」と詠んでいると言っている。歌というのは人の心情が託されているもので、歌の「たとふ」が持っている「本意」を考えて理解しようとする態度が見られる。

以上のように、人の心情は古哥に「たとへ」と「本意」が混じって詠むのが多いと注釈している。

また、125段では

むかしをとこわつらひて心ちしぬへくおほえければ  
 終にゆくみちとはかねて聞しかときのふけふとは思はざりしを  
 しぬる事のがれぬ習とはかねて聞おきたれど、きのふけふならんとは思はざりしとは、たれたれも時にあたりて思ふへき事なり。これまことありて人のをしへにもよき哥なり。後々の人、しなんとするにいたりて、ことごとしき哥をよみ、あるひは道をさとれるよしなどをよめる、まことしからずしていとにくし。ただなる時こそ狂言綺語もまじらめ。今はとあらん時だに心のまことにかへかれかし。業平は一生のまこと此哥にあらはれ、後の人は一生のいつはりをあらはすなり。大和物語云。水尾のみかとの御時、左大弁のむすめ弁のみやす所とていますかりけるを、在中将しのひてかよひけり。中将やまひいとおもくしてわつらひけるを、もとのめもあり。これはいとしのびてあることなればえいきもとふらひたまはず。しのひしのひになんとふらひけること日々ありける。さるにとはぬ日なんありける。やまひいとおもりてその日になりけり。

のように、死ぬ道は逃れないことであると聞いていたけれど、昨日今日と泊っているとは思わなかったという歌の内容を説明し、誰でもこの時にあたる事であると述べている。

また、業平は一生の本当の事をこの歌に表しているが、後の人はこの歌を大げさに詠んで、「狂言綺語」が混じった虚偽を表す歌として見ていると述べている。歌は人にいい「教え」になるし、世の事、人の心情を表すものとして詠まれるものであると言っている。

以上のように、歌を理解する態度について考察してみたが、歌というのは「喩え」が持つ

ている「本意」を表現するので、「喩え」と「本意」が混じって人の心情とかを託して表すものであると注釈している。「喩え」が持っている「本意」を通じて歌を理解しようとする態度が見てとれる。

## 2. 2 物語の「文勢」について

『勢語臆断』は、「物語」の「文勢」について触れている部分が少ないが、これについて実例をあげてみよう。まず序文から見ると、

此物語と古今集と相違の事あり。彼は勅撰なればたしかにて、是は物語なれば筆にまかせたる事あるへし。後撰集拾遺集これに准らふへし。

年月諸人の官位等たしかならぬ事あり。女御多可幾子の四十九日の法事の事をいへる段のたくひ也。

かやうの物語のたくひは、もろこしにも虚実をまへてかくよし五雜俎といふ物にかけり。しからざれば文勢なき故なるへし。此物語も実録ならぬ事おほく見ゆるは、さる故と見てあるへし。

のように、『伊勢物語』を業平の一生の事を記していると考え、「虚」と「実」が混じっているのが「物語」であると理解している。7)それで、作者の「筆」が表れている所は「虚」で、このような所は『実録』などと合わない場合である。作者は「虚」を通じて、「物語」の「文勢」を顕していると述べている。すなわち、作者の「筆」によって、「虚」と「実」が混じっているので『実録』『勅撰集』などと比較すると、史実と合わない時があるが、このような所が「作れる事」と理解して、作者の「筆」による「物語」の「文勢」について説明している。

次に、6段では

あはらなるくらに女をおくにおしいれてをとこゆみやなくひをおひてくちにをり

くらは座の字をもて注せる事あり。あはらなる座といふ事も、其座のおくくちといふ事も心得かたければ、只庫蔵倉廩等の字にて、物をおくくらなり。くらのあはらなるを道に見つけて、しはしいれおきて、風雨を凌ぎ明るまを待心也。弓胡籙をおふといへるに付て、業平近衛司

7) 独自性が見られる『勢語臆断』の「物語」についての理解態度を旧注と比較すると、宗祇説を伝え受けながら注釈を書き加える旧注の場合は、「作物語」という用語で説明しているが、これは段によって、使っている。すなわち、業平の一期の間にあった事であると『伊勢物語』を見ながら、古い歌などを書き加える段とか、業平と時代が合わない人の歌がある場合は「作物語」段であると注釈している。一方、『勢語臆断』は「物語」は「虚」と「実」が混じっているもので、実事は文献を通じて証し、虚事は作者の「筆」によって書かれるもので、「物語」の虚事としての表現については、そのまま理解するのであると注釈している。以上のように、旧注とは異っている『勢語臆断』の「物語」についての理解態度が分かる。

の説あり用へからず。作れる事なれば只そのままに見るへし。みしきびしいはは、業平は貞観六年三月に、左兵衛権佐より佐近衛権少将に遷らる。此段の末にいとこの女御の御もとにつかうまつるやうにてとをかきたれば、染殿後の女御にておはしけんことは二条后は童女にておはすべければあはぬ事也。

のように、「くら」は「座」の字を持って注釈することがあるが、「くらのあばらなる」を道に見つけて、ちよつとの間に入れて置いて、風雨を凌いで明るくなることを待つ心であると述べている。また、業平の「近衛司の説」を否定しながら、この段は「作れる事」で、只そのまま見るべきであると述べている。その理由は、業平は「貞観六年三月に、左兵衛権佐より佐近衛権少将」に移ったと述べ、この段の末に「いとこの女御の御もとにつかうまつるやうにて」と書いているので「染殿後の女御にておはしけん」ということは、二条后が童女であるので合わない虚事であると説明している。

また、65段では

殿上にさふらひける在原なりけるをとこのまたいとわかかりけるをこの女あひしりたりけり  
在原なりけるをとこは業平なり。此ほとをはかるに四十歳はかりなるへきを、いとわかかりける  
をとかけるは物語の故なり。

のように、「物語」の「在原なりけるをとこ」は「業平」であるが、この時を考えて業平は「四十歳」になるのに「いとわかかりける」と表現するのは、作者の「筆」にまかせる「物語」の故であると述べている。

さらに、85段では

むかしをとこ有けりわらはよりつかうまつりけるきみ  
惟高の御年よりは業平は廿はかりまされば、わらはよりと いへるはたかへど、物語の中にさ  
る事すくなからねば、これをのみとがむべからず。これたかわかくまします時よりといふ心に  
いへる説あれど、しからばわらはの御時より、わらはにおはしましける時よりなどいふべきにや。  
此段は前段の上にあるへきことなるが、段々に同事のあまりにかさなれば、うるさきゆゑに、  
一段へだててわざとここにかける歟。次第をかならずともすまじければ、おのつからしかるに  
や。

のように、「物語」の「わらはより」という表現について説明している。「これたかわかくまします時よりといふ心」の説もあるが、そうであれば、「わらはの御時より、わらはにおはしましける時より」と言うべきではないかと述べている。また、此段は前段と同じ事が重なるので、一段を隔てて、この段に書いているのではないかと「物語」の構成についても、触れてい

る。

また、101段では

むかし左兵衛督なりける在原のゆきひらといふありけりその人の家によき酒ありとききてうへにありける左中弁ふちはらのまさちかといふをなんまらうとさねにてその日はあるしまうけしたりける行平は貞観六年に左兵衛督となる。良近は太宰員外帥正三位吉野第四子也。貞観十六年に左中弁となられば、ここにかけるやう叶はず。良近は貞観五年より左少弁なりければ、行平左兵衛督なりける時は猶当官は左少弁なり。物語なる故に筆にまかせてかけるなるべし。よき酒ありと聞てとは、此所すこしいひたらぬやうなれど、これは良近の行平の家に名酒ありと聞をよびて、もとより上戸なれば、のぞみ思はるる故に、正客によぶ心なり。まらうとさねは上につかひさねと有したぐひにて、客人上首なるをいふ。

のように、行平は貞観六年に左兵衛督であるが、良近は貞観五年から十五年まで「左少弁」で、貞観十六年からは「左中弁」になっていると証明している。しかし、「物語」では良近が「左少弁」の時を「左中弁」と書いていると注釈している。これは、「物語」の故に「筆」に任せて書いていると述べ、史実と比較して「虚」の所を「物語」の「文勢」として理解していることが分かる。

また、79段では

これはさたかすのみこ時の人中將の子となんいひけるあにの中納言ゆきひらのむすめのはらなり

是は作者の注也。貞数親王延喜十三年までましましたれば、伊勢が筆にあらぬ証なり。業平は好色の人なれば、時の人のうたがひけるにや。

のように、これは作者の注であるが、貞数親王は延喜十三年までで、時代を考えると、伊勢の「筆」ではない証であると述べている。業平は好色の人であるので、その時の人がこのように疑って言ったのではないかと述べ、別の注釈は書き加えていない。

以上のように、『勢語臆断』は「物語」の内容を「虚」と「実」に分けて「虚」の事は作者の「文勢」として理解し、そのまま読むべきであることを強調する注釈態度を示していることが分かるのである。すなわち、「物語」の表現そのままを充実に理解しようとする態度と内容の流れについて考え、作者の「筆」に任せる「文勢」を把握しようとしていることが分かる。

### 2.3 文献的な証明を重視する注釈態度

契沖以前の注釈を旧注というのに対して、契沖の『勢語臆断』からは新注と呼ばれて

いるが、『勢語臆断』には「和漢の書」のみならず、「俗」の説まで挙げ、語源などの事実を一々証明しようとする注釈態度が見られる。文献を通じての記録中心の注釈態度で、『伊勢物語』注釈を行う契沖の独自性は、新注の時代を開く注釈書として意味があるのである。

以下において、その具体的な内容を述べてみよう。

### 2. 3. 1 語源について

『勢語臆断』は、物語の語句の語源について、その意味を追求し、詳しく注釈しようとする態度を見せている。これは、従来の注釈書のように、旧注の師説を従いながら注釈を書き加える形式ではなく、文献を通じて、記録を重視する態度で一貫しているため、国学者が主流になった新注の特徴に繋がっている所である。<sup>8)</sup>

まず、1段から見ると、

昔とは大古近古をいはず、過にしかたをいふなり。

(前略) 和漢の書に此発端おほし。殊に此物語は段々むかしをもて端をおこせり。をとことは業平をさしていへり。をとこはをとめに対する、ほめたる言なり。ひこひめ、むすこむすめなど、およそ男子には子つけ、女子にはめをつけたり。子男子通称の故なり。

神代紀に少男此云鳥等孤。少女此云鳥等咩と自注をくはへたまへり。かかればをとこと書へし。おとことかくは仮名たかへり。をのこといふは似たる事ながら心かはれり。それは女をめのこといふにむかへることはなり。をとなる子をは親のわきて愛すれば、弟子といふ心也。

鷹神紀云。(中略) うひかうふりは元服なり。

漢書に初冠をうひかうふりとよめる是なり。

孝徳紀に初位をうひかうふりとよめるは、叙爵につきていへはことなり。うひかうふりろ書へし。

うるかうふりとはかくへからず。古今集物名に貫之の、さうびをわれはけさうひにそみ」つるとかくされたる其証なり。(中略) 業平の一生の事をするす故に、うひかうふりしてとははかき出したれど、かりにゆかるるはいつにてもあるへし。

8) 『勢語臆断』の文献を通じる根拠を重視する注釈態度は以後、『伊勢物語童子問』に影響を与えるし、また『勢語臆断』と『伊勢物語童子問』を基にして独自の説を進める『伊勢物語童古意』に継承されるので、本稿では『伊勢物語童子問』の例を挙げながら考察してみる。『伊勢物語童子問』の9段を見ると、「すずろ」について注釈しているが、引用すると「辛」字を漢書に「すずろ」とよめるは、字注いまだ所見なければ是非をいひかたし。此物語にては、からきめを見ると云意に「すずろ」を尺せて「辛」の字はあたるべし。「坐」の字を「すずろ」とよむ義は、文選に、無故辞と注あれば、「不慮」の二字を「すずろ」とよめる義、同じかるべし。「不意」の二字をも「すずろ」とよむも、無故儀にかなふべし。詩に「坐愛桃林暮」と作れる「坐」の字を「すずろ」とよみ来れるは、「慢」の字を「すずろ」とよむ義にかなふべし。いづれも義は打かなふ事なれども、「すずろ」といへる詞、語釈を知らずして解する人有べからず。」片桐洋一(2003)『伊勢物語古注釈書コレクション(第四巻)』和泉書院 p50

このように、『伊勢物語童子問』にも、『勢語臆断』のように文献を通じて、記録を重視する態度であるのが確認できる。

のように、「和漢の書」にこの発端が多いと言い、この物語はすべての段に「むかし」という表現で、発端を新しく始めると述べている。そして、「をとこ」は業平を指していると注釈し、業平の一生の事を記すために「うひかうふりして」と書いていると言っている。また、「をとこ」と「うひかうふり」の語句について、「和漢の書」、すなわち『神代紀』『鷹神紀』『漢書』などの古代文献を引用しながら説明しているが、これは、この書の古学を復興しようとする態度がよく顕れている部分と言えよう。

次に、同じ1段では、

むかし人はかくいちはやきみやひをなんしける

いちはやきはく心あまた有 > (前略)

日本紀に厳<忌>の字をよめるは俗にたたはしきといふ心にてかなはず。延喜式鎮火祝詞にいちはやびとあるもこれにおなし。

文選にさまざまの字をうちはやしとよみ、

遊仙窟に述遣をよめるもいちはやしともし詞と聞ゆれと又叶はず。

続日本紀にむちはやしといへるも同じ詞なから是は危くさはかしき心也。

大和物語に、平中にくからす思ふわかき女を、めのもとにゐてきて置たりけり。此めいちはやくいひければちかくたにえよらて云々これもたたはしといふに近し。

源氏物語若菜上に、いとかくにはかにあまるよろこひをなんいちはやきこちし侍とあるくも続日本紀とおなしく> (は) あやうき心にや。今ここにいへるはくはなはたしき> (すみやかなる) 心也。

のように、「いちはやき」について『日本紀』から「俗」の説まで挙げ、意味を説明している。『日本紀』では、厳<忌>の字を読んでいるが、「俗」では「たたはしき」という心に適っている。また、『文選』では「さまざまの字」を「うちはやし」と読み、『遊仙窟』では「述遣」の字を読み、『続日本紀』では「むちはやし」と言いながら、「危くさはかしき」心であると述べている。『大和物語』でも「いちはやく」と言っているが、これも「たたはし」という心に近いと説明している。『源氏物語』でも「いちはやき」と言っているが、ここでも「あやうき」心ではないかと述べている。

以上のように、一つの詞について、いろいろな文献を出典として引用しながら説明を加える形式を取っている。すなわち、出典を明らかにして根拠を重視する注釈態度を見せているのである。

また、67段では

むかしをとこせうえうしに思ふとちかいつらねていつみのくにへきさらきはかりにいきけり

せうえうは毛詩云伊人於焉遣<遙> (揚) 莊子に逍遙遊篇あり。日本紀にあそふとよめ

り。古今詞書にもかもの「川原にかはせうえうしけるともにまかりてといへり。(省略)

のように、「せうえう」について注釈しているが、『毛詩』には「逍遙」であり、また、『莊子』に「逍遙遊篇」があると述べている。また、『日本紀』と『古今集』では「あそふ」と読んでいたことを説いている。

以上のように、『毛詩』『日本紀』『古今集』のような文献を引用し、「せうえう」の語源を説明しているのがわかる。

さらに、102段では

あてなる女のあまになりて世中を思ひうむして京にもあらずはるかなるやまさとにすみけりもとよりしそくなりければよみてやりける

うむじてとは、俗にも常にいふ事也。物かたりの中に「又はくむじてともいへり。くんとは屈の字の音を和語にさはいへるなり。久と宇と同韻にて通ずれば、くんをうむとはいへり。又声を捨て韻をとる法あり。久の韻は宇なる故に、久の声を捨て宇の韻を取てうむといふかともおぼゆ。慍の字なりといへど、くんずるといふこと有れば、然るへからず思ふ故に、かしがまきまで注するなり。

竹取物語に、おいらかにあたりよりだになありきそとやはのたまはぬといひてうむじてみなかへりぬ。

のように、「うむして」の語句について説明しているが、これは「俗」にも常に言う事であると言っている。物語の中では「くむじて」とも言っているが、「くん」とは「屈」の字の音を和語はそうのように言っていると述べている。「久」と「宇」は「同一韻」に通じるので、「くん」と言っている。また、声を捨てて韻を取る法があるのを挙げ、「久」の韻は「宇」であるので、「久」の声を捨てて「宇」の韻を取て「うむ」というのも考えられると述べている。そして、『竹取物語』の実例も加えているのが分かる。9)

以上のように、『勢語臆断』は、古代文献から「俗」の説まで引用し、実例とか一つの詞の用字法まで詳しく説明して注を行っている。旧注の、師説を従いながら注釈を加えることではなく、文献を出典として引用して説明を加える形式を通じての新しい注釈態度を見せているのである。

9)たとえば、『伊勢物語童子問』の5段を見ると、「先に問る、「よみて」を「よんで」と証をいふごとく、「つゐひち」を「ついんち」とよむは、「ひ」をはぬる習なり。「つゐんち」少持心有てよむべしとは、五音第二の音伝をし給はぬ故なり。皆「つゐん」のかなは「つい」と書べし。和名抄に、築垣を豆以比知と有をも一証とすべし。築はつき也。「き」の音を「い」にかよはす事、常の例なり。」片桐洋一(2003)『伊勢物語古注釈書コレクション(第四巻)』和泉書院、p31

このように、『伊勢物語童子問』でも、用字法について詳しく注釈するのが確認できる。

### 2. 3. 2 史実を証明する注釈態度

『勢語臆断』の序文を見ると、「此伊勢物語は在原業平朝臣の一生の事をしるせり」と書いている。このように、『勢語臆断』は、『伊勢物語』を業平の一生として理解しているのであるが、特に、『三代実録』を通じて、史実を証明する注釈態度が目立っている。この章では、これを中心に考察してみよう。

『伊勢物語』の登場する人物の事蹟については、『三代実録』を引用し、その史実を正確に証そうとしている。すなわち、主人公を業平として見て、物語の表現については『三代実録』を根拠としてその史実を記録し、充実にその史実を証そうとする注釈態度が見られるのである。

まず、16段から見ると、

むかしきのありつねといふ人有けりみよのみかとにつかうまつりて時にあひけれとのちは世かはり  
時うつりにければ

三代の帝とは仁明文徳清和なり。或説に淳和仁明文徳の三朝に仕へ奉りて、清和天皇の朝に至りておとろへたるよし見えたれど、これは国史を能考かへすして強て此段にかなへていへるなり。三代実録第三十云。元慶元年正月廿三日乙未従四位下周防権守紀朝臣有常卒。有常左京人。正四位下名虎之子也。性清警有儀望。少年侍奉仁明<天皇。>承和中擢拜左兵衛大尉。数年右近衛権将監兼近江権少椽。云々。貞観九年為下野権守。秩満為信濃権守。十五年」授正五位下。十七年為雅楽頭。十八年至従四位下為周防権守。卒時年六十三。以上始終を挙て文徳天皇の御世の昇進を略せり。元慶元年より逆にかそふれば、承和元年は有常十九歳なれば、少年侍奉仁明天皇といへるにかなひて、淳和天皇には仕へ奉られざる事紛なし。(中略)実録にあらざる事史伝にあはせて知へし。

のように、「三代の帝」についての「或説」を否定し、「国史」すなわち、『三代実録』を挙げて説明しているのがわかる。「三代の帝」とは、「仁明」、「文徳」、「清和」である。しかし、「或説」には、「淳和」、「仁明」、「文徳」の三朝であると言っている。これは、「国史」をちゃんと考えていない説であると述べている。『三代実録』には、「有常」は「元慶元年」の「正月廿三日乙未」、最終官位が「従四位下周防権守紀朝臣」である。少年の頃から「仁明天皇」に奉侍し、「承和年」の間に「左兵衛大尉」次いで「右兵衛権将監」となり、また「近江権少椽」を兼務したと書いている。「貞観九年」は、「下野権守」となり、任期を満了した後は「信濃権守」を務めたと言っている。「十五年」からは、「正五位下」と昇叙、「雅楽頭」、「十八年」までは、「従四位下」に至って、「周防権守」に叙任されたと説明している。

以上のように、『勢語臆断』は、始終を挙げて「有常」の「文徳天皇」の御世の昇

進を略した『三代実録』を引用しているのである。「元慶元年」から逆に数えると、「承和元年」は、「有常」が十九歳であるので、少年の時の「仁明天皇」に奉侍するという事に適っているので、「淳和天皇」に仕えなかったのは確かなことであり、「淳和天皇」が「三代の帝」であるという説を『三代実録』の史実を通じて否定している。

そして、『三代実録』にないのは『史伝』に合わせて知るべきであると言い、根拠に拠って史実を証明しようとする態度が確認できる。

次に、65段を見ると、

かかるほとにみかときこしめしつけてこのをとこをはなかしつかはしてければ  
流罪の事国史に見えされは作りてかける歟。古注東山に隠居するをいふといへり。下に人のくにより夜ことにきつつふえをふくとあれはさもあるへき歟。三代実録を見るに、貞観四年より七年までは官位の昇進など次第に見えたり。八九十の三年しるせることなし。その間に籠居せらるるほどの事の有りけるにや」

とある。すなわち、「古注」<sup>10)</sup>の場合は、根拠なく「東山に隠居する」<sup>11)</sup>と注釈しているが、『勢語臆断』は、『三代実録』を根拠として挙げ、その時期を証す注釈態度を見せているが、これは「古注」との大きな違いである。

また、69段では

齋宮は水ののを御時文徳天皇の御むすめこれたかのくみこのゝいもうと  
これは作者の注なり。抑高階峯緒子師尚は齋宮腹とて実は業平の息なりといふ事は信じしかたき説也。其故はく上に>三代実録を引て証ずることくならば、貞観七年より元慶元年までは十三年なれば、それまで露顕せずして齋宮の事故なく帰給ふ事あらむや。只夜の夢とさためたれば、露顕せずと知へし。

のように、説明している。これは作者の注であるが、「高階峯緒」の子である「師尚」は、齋宮の腹で実は業平の息子であるという事は信じがたい説であると言っている。『三代実録』に記されているので、それを根拠として挙げ、「師尚」が業平の息子である説を否定している。

10)このように、歴史的な事実を証そうとする注釈態度は、古注でも見えるが、古注では根拠として挙げている出典なく、注釈の内容である時期とかが合わないことが確認できた。それで、このような注釈態度を批判して生じたのが旧注である。旧注では、物語を文芸鑑賞的な態度で読もうとするのである。しかし、新注である『勢語臆断』には、根拠としての文献の内容をそのまま引用してその語句について、充実に史実を記録しているのが、古注では根拠なく、史実と合わない内容を注釈しているのが『勢語臆断』との大きな差である。

11)古注である『冷泉家流伊勢物語抄』には、「此男をばながしつかはすといふは、東山にをしこむなり」と注釈している。片桐洋一 (1987) 『伊勢物語の研究(資料編)』明治書院 p360

さらに、76段を見ると、

このゑつかさにさふらひけるおきな人々のろくたまはるつくい > (る) てに御くるまよりたまはりてよみてたてまつりける

三代実録第廿七云。貞観十七年正月十三日従四位下行右馬頭在原朝臣業平為右近衛権中将。これによるに十七十八兩年のうちなるへし。六年三月に左近衛権少将となられけれども、七年三月に右馬頭にうつられければ、それにはあらず。此時五十余歳なれば、おきなといへり。

のように、ここも『三代実録』を根拠として説明している。要するに、業平の官職について、この時は、「右馬頭在原朝臣業平為右近衛権中将」であると言い、これは、「十七十八兩年」の時の事で、「五十余歳」であるので、物語では「おきな」と言っていると説明していることがわかる。物語の語句についての根拠を『三代実録』を通じて、充実に注釈しようとしているのがここでも確認できる。

また、77段の場合は、「安祥寺にてみわざしけり」について、「安祥寺は山科にあり。五条後の御願にて建られたり。(中略)三代実録第二云。貞観元年四月十八日癸卯緑皇太后御願置安祥寺年分度者三人」と注釈している。このように、「安祥寺のみわざ」がいつ行われたかについても、『三代実録』の記事を引用して説明しているのである。

以上のように、『勢語臆断』は歴史書の史実を根拠として物語の語句を説明しようとする傾向がはっきりと顕れている注釈書と言えよう。

### 3. おわりに

以上のように、『伊勢物語』注釈史において、新注の時代を開く『勢語臆断』の内容的特徴について考察してみたが、それをまとめると、次のようなことが言えるだろう。まず、歌を理解する態度については、歌というのは「喩え」が持っている「本意」を表現するものであるので、「喩え」と「本意」が混じって人の心情とかを託して表すのであると注釈している。すなわち、「喩え」が持っている「本意」を通じて歌を理解しようとしていることが分かる。

二番目は、『勢語臆断』には『伊勢物語』を業平の一生の事を記していると考え、「虚」と「実」が混じっているのが「物語」であると理解している。それで、作者の「筆」が表れている所は「虚」で、このような所は「実録」などと合わない場合である。

作者は「虚」を通じて、「物語」に対する「文勢」を顕していると述べている。すなわち、『伊勢物語』は作者の「筆」によって、「虚」と「実」が混じっているので、『三代実録』『勅撰集』などと比較すると、史実と合わない時があるが、このような所が「作れる事」であると理解し、作者の「筆」による「物語」の「文勢」について説明している。

三番目は、文献的な証明を重視する注釈態度であるが、まず、語句の語源については、詳しく注釈しようとする態度が見られるが、古代文献から「俗」の説まで引用し、実例とか一つの詞の用字法まで詳しく説明していることが分かる。師説を従って加えることなく、文献を出典として引用して説明を加える形式の新しい注釈態度が確認できる。そして、『伊勢物語』を業平の一生の事として理解するのであるが、特に、『三代実録』を通じて史実を証明しようとしている。『伊勢物語』に登場する人物の事蹟については、『三代実録』を引用し、その史実を正確に証そうとしている。すなわち、主人公を業平として見て、物語の表現については、『三代実録』を根拠としながら、その史実を記録しようとする注釈態度を見せている。

以上のように、契沖の『勢語臆断』は、師説を従って注釈を加える旧注に比べて、古学の復興と記録を重視する文献中心の注釈態度で一貫しており、そういう意味で『伊勢物語』注釈史において、新注の時代を開く注釈書として位置づけられよう。

## 【参考文献】

- 太田藤四郎 (1980) 『続群書類従』第18輯下 続群書類従完成会 p644  
 大津有一 (1986) 『増訂版伊勢物語古註釈の研究』八木書店 p25  
 片桐洋一 (1987) 『伊勢物語の研究(研究編)』明治書院 p488  
 \_\_\_\_\_ (1987) 『伊勢物語の研究(資料編)』明治書院 p360、p610、pp672~673、p771  
 \_\_\_\_\_ (2003) 『伊勢物語古註釈書コレクション (第四巻)』和泉書院 p31、p50  
 築島裕・林勉・池田利夫・久保田淳 (1974) 『契沖全集第九巻』(勢語臆断源註拾遺他) 岩波書店 pp7~218  
 橋本不美男・有吉保・藤平春男 (1987) 『歌論集』小学館 p562  
 福井真助 (1999) 『伊勢物語』『新編日本古典全集12』小学館 pp240~241

## 要 旨

『伊勢物語』注釈史においては、国学者と称せられた人々が主流となっている注釈を新注と呼んでいる。本論文は、このような新注の時代を開く『勢語臆断』の内容的特徴を考察したものである。それで、契沖の『伊勢物語』に対する理解、また『勢語臆断』を通じて新注の注釈態度を見出すことができる。

『勢語臆断』の内容的特徴について考察してみると、まず、歌を理解する態度については、歌の「たとふ」が持っている「本意」を考え、理解しようとする態度が見られる。

二番目は、物語の「文勢」について説明すると、『伊勢物語』を業平の一生の事を記していると考えながら、「虚」と「実」が混じっているのが「物語」であると理解している。それで、作者の「筆」が表れている所は「虚」で、このような所は『実録』などと合わない場合がある。作者は「虚」を通じて、「物語」に対する「文勢」を顕していると述べている。

三番目は、文献的な証明を重視する注釈態度であるが、まず、語源について、詳しく注釈するのが目立っているが、旧注の師説を従って注釈を書き加える形式ではなく、『勢語臆断』では、文献を通じて、記録を重視する態度であるのが確認できる。そして、史実を証明しようとする注釈態度が見られるが、『伊勢物語』の登場する人物の事蹟については『三代実録』を引用しながら、その史実を正確に証そうとしている。

以上のように、契沖の『勢語臆断』は、師説を従って注釈を加える旧注に比べて、古学の復興と記録を重視する文献中心の注釈態度で一貫しており、そういう意味で『伊勢物語』注釈史において、新注の時代を開く注釈書として位置づけられよう。古学の復興と記録を重視する注釈態度を通じて、『伊勢物語』の注釈史の中での『勢語臆断』の位置付けが可能になってくることであろう。

キーワード：契沖、勢語臆断、伊勢物語、注釈、新注

투 고 : 2011. 5. 31  
1차 심사 : 2011. 6. 11  
2차 심사 : 2011. 6. 25